「友松」の変遷 Ⅱ

2011.1.11 発行
シリーズ 2−8
「友松」43 号

（1）　第43号　友松会報　昭和32年9月10日（火曜日）

友松会の近況

会長　小林梅茂（大四卒）

一、別稿所載のやうに本年五月の女子部総会は出席会員実に五百名を超え画期的な成功を収めた。この事は女子役員格段の努力の結果には相違ないが他面方法さえ適切なら会員は多数集つて呉れる事を示す。乃ち会員は強く求めては居るのだ。

二、今年度決算書にある如く本会の会費納付会員は五千名を超えた。もちろん本会有史以来の快事で極めて重視すべき事柄と思う。

尚六千達成の見込みもあるに至つては意味しいと申すより恐ろしい気がする。このやうな会員の熱烈熱望に何を以て酬いたらよいのか。ここに大きな問題がある。

三、以上の二つの事実から会員が本会に寄せつつある希望をこえに耳を傾けねばなるまい。

従来とても本会の在り方その他について、種々の希望もあり批判もあつた。今こそ会員各位の総力を結集し良識を求めて本会百年の計画を樹立実行すべき秋ではあるまいか。

四、別項本年度予算中に「クラス代表会議費」か計上可決されている。これは決して儀礼的な行事ではなく、本会の在り方、事業面、役員構成、役員と会員との調整、老若男女現職非現職等あらゆる面からフレッシュな意見を吐いて頂き直接本会の飛躍に資すべく計画されたものである。

此の趣旨に徴して協力を願う。

五、尚この際各会員からも直接本部宛「友松会をより良くする為の意見」を続々お寄せ下さることをお願いする。本部で是等御申出の意見を整理して「クラス代表会議」に付議し実行に移したい。かくて個々の会員に直結した友松会とし、併せて会費納入会員五千名突破の道標としたい。

発行所
横浜市西区紅葉丘五三
横浜市教育会館内
神奈川県友松会
電話 ㊸8589番
振替口座 横浜359番
編集人　森田浪太郎
発行人　西川　豊吉

御挨拶

学芸学部立野分校主事
客員　竹内秀雄

暑熱烈しかつて夏も去り、秋気掬すべき季節を迎えようとする折柄、会員の御様には如何御暮しですか。この紙上を借りて御伺い申上げます。

昨秋主事に就任以来、友松会員の皆様から格別な御厚誼に与り心から感謝しております。特に昨年度末就職対策委員の一人として、その担当地区を歴訪して一番心強く感じましたことは、会員諸君のあの整然たるチームワークのとれた協調御支援でありました。今や会員一万を擁するこの友松会は、正に郷土神奈川の教育の発展進歩に貢献する原動力でありまして、わが学部に対する一大支柱です。当大学の一般教育の場であり、県下の義務教育のモデル校を以て任ずる附属小、中学校を併有するわが立野分校におきましては近き將来、本学の統合計画により清水ケ丘に移転するに当り、一般教育のあり方について再検討を加えるとともに、学芸学部本来の使命たる教員養成についてもまた反省と研究を怠らず、その万全を期しております。この秋に当り多年青英の道に精進せられる諸様より不断の御支援と示唆とを賜わることは斯道の改善に多大な貢献をするものと信じます。この寄与なくしては、伝統的師魂の鼓吹なる到底思いもよりません。何卒会員諸君におかれましてはますます御自愛遊ばされて、今後とも御協力と御支援とを賜わりますようお願申し、就任の御挨拶と致します。

盛んになった支部の総会

支部だより

本部として一万以上の会員を対象として総会を開催したところで、集まる者は割合に少ないが現況に鑑み、成るべく各支部毎の総会を盛んに開いてもらうことになつて、費用の一部として会員会費一〇〇円の二割四〇円を支部に返戻し、総会開催本部に連絡があれば出来得るだけ役員が列席して、一支部に対し補助金一、〇〇〇円を贈呈することにしている。前年度は、中郡秦野市、小田原市、神奈川区茅ケ崎市の八支部で総会が開かれた。本年度となつて既に津久井郡、小田原市、中郡秦野市、愛甲郡厚木市、鶴見区、鎌倉市の六支部におよんでいる。総会の開かれた支部は、結果も固く連絡もよくとれ、会費も完納となつている。できることなら少くとも、一年おき位に開いていただくことを望んでおる。（西川）

東京支部

東京支部は他の支部と異り、教職を離れ実業界において活躍している人が多いという特色をもつている。従つて各自非常に忙しい日常であるために現在百六、七十名の会員があるが、支部会を開いても二十数名足らずの出席者の時がほとんどである。会長は大正二年卒、現在東都実業界の花形大和自動車株式会社の社長新倉文郎氏であり、副支部長は大正九年卒、衆議院議員自由党の実力者櫻田弘氏と大正十二年卒の不肖小生とで

会長の「友松会の近況」の文中、会費納付会員が 5,000 名を超え、近々、6,000 名達成の見込みもあると書かれている。そして、会員各位の総力を結集し「本会の百年の計画を樹立達成すべき」と結んでいる。

百年を超えた友松会は、当時の会員数を下回っている。何とか会員を増やすことを考えなければならない。

特集記事は「神女師創立五十周年」に関するもので、総会には 500 名を越す参加者があり、盛会の内に創立 50 周年総会が行われたと記されている。

4 面は全紙面、「式典に参加して」「総会に参列して」「感激のその日」等の記事が載せられている。

第43号　友松会報　昭和32年9月10日（火曜日）（4）

特集号

母校創立五十周年記念総会をかえりみて

神女師創立五十周年

開会の御挨拶

五十周年記念式に参加して

記念の会に招かれて

女子部総会の感想

私の黄金時代

景慕の胸像

長谷川一郎翁

三橋嘉一君

物故者を悼む

左の記事は、大先輩である長谷川氏と三橋氏が、長年の功績を称えられ、胸像が建設されたというものである。銘文に「名利を離れてひたすら青少年の教育に専念され、教育を改革した人、生徒の立場をよく理解し、限りなく愛し、常に自分の力で判断し、道理に従い、自分の責任を完遂することを身を以って教示された」と書かれた一節があるという。